

民族排外主義はどこへ行き着いたか。 外国籍の子供たちが標的にされている！

子どもたちが標的に

朝鮮民主主義人民共和国による拉致問題が明らかになって以来、日本国内の北朝鮮に対する感情は極度に悪化している。

もちろん、国家による拉致という非人間的な行為を許してはならない。拉致被害者の、一刻も早い帰国を実現しなければならない。

しかしそのときに私たちが戒めなければならないのは、「国家」や「政府」への批判と、個々の「個人」や「民族」への非難は厳密に区別しなければならない、ということだ。

日本には、1910年の「韓国併合」の結果としていまも多くの在日韓国・朝鮮人が住んでいる。

ところが「拉致」や「テポドン発射」などが報道される都度、心ない日本人による在日朝鮮人への暴言や、生徒の着るチマチョゴリ（朝鮮の民族服）の切り裂きなどが起きる。

さまざまな問題に対して、ある意味でもっとも心を痛めているのはこの在日の方たちである。まして、民族学校に通う子どもたちに暴言を浴びせるような行為は、恥ずべきことと言わなければならない。

しかし日本ではいま、そのような事例がより悪質な形で拡大しつつある。しかも、子どもたちを標的にするという、もっとも卑劣で陰湿な方法で。

京都で起きたこと

その男たちは突然、授業中の小学校の校門の前にあらわれた。

異変を察知した教員が門を閉ざすと、男たちは学校に向かって、スピーカーで大声をあげ始める。

「開けんかい、コラァ！」

「門を開けるォ！」

その罵声は、教室にいた子どもたちの耳にも当然届いた。

先生たちは急いでカーテンを閉めたものの、男たちの声は否応なしに子どもたちの耳に届く。

不安に怯えて泣き出す子どもたち。その恐ろしさは、

想像を絶するものだったろう。

「日本から出て行けえ！」

「日本に居させてやっとなるん！」

「スパイの子どもやないかっ！」

日の丸を持った男は、こう言ってあざ笑った。

「キムチ臭いねん！」

彼らは1時間にわたって罵声を浴びせ、学校の備品を破壊すると、「また来る」と予告して去っていった。

彼らの集団の名前は「在日特権を許さない市民の会」。

そして彼らが襲ったのは、京都朝鮮第一初級学校。日本



▲学校の門前の集団

に暮らす在日朝鮮人の民族学校である。（初級学校は日本の小学校に相当する）

これが、昨年（2009年）の12月4日に京都で実際に起きたことである。

この事件を撮影した動画は以下で見ることができる。ぜひ、それがどのようなものだったのか、ご自身でご確認いただきたい。（<http://corea-k.net/date/000.wmv>）

カルデロンノリコさんを名指して

「在日特権を許さない市民の会（在特会）」とは、在日韓国・朝鮮人が持つ（と彼らが主張する）「『特権』を日本からなくす」ことを目的に設立された自称「行動する保守」団体である。

彼らが未成年の子どもを標的にしたのは、今回がはじめてではない。

昨年、フィリピン人のカルデロンさん一家が強制送還となった。だが、中学生だった長女のノリコさんだけは、両親と離れてひとり日本に残ることとなる。

ところが「在特会」はあろうことか昨年の4月、ノリコさんの通う埼玉の中学校にデモを行ったのである。

学校には、ノリコさんがクラスメイトとともにいた。彼らは拡声器で、

「不法滞在外国人を叩き出せ！」

「ノリコ・カルデロンの在留を許さないぞ！」

と、まだ中学生であるノリコさんの実名をあげて、シユプレヒコールを行ったのだ。

ノリコさんはどんなに恐ろしく、つらかったことだろう。

ノリコさんだけではない。共にいた日本人の子どもたちの心にも、深い傷を残したのではないだろうか。

さまざまな主義や考えを持ち、それを主張することは自由だ。しかしそれにも限度というものがある。

日本でもっとも「特権」を持つ外国人は、日米地位協定に守られた在日米軍である。

しかし、彼らが米軍基地にデモを行い、アメリカンスクールの子どもたちを威圧することはない。



▲中学を取り囲む在特会

一方、韓国・朝鮮やフィリピンなどアジアの人々に対しては差別的な罵声をあびせる。しかも、小学生や中学生を大人の集団が威圧する。

彼らの行為を知れば、世界の人々は逆に「大東亜戦争」が「アジア解放のための戦争」などではなかったことを確信するだろう。

日本社会に潜む排外・排外主義こそが問題

彼らのような排外的な人種主義は「レイシズム」と呼ばれる。だがこのようなアジア蔑視の主張は、日本人の中でも「ごく一部のものにすぎない」のだろうか。

社会の矛盾が拡大し格差や貧困が深刻になるとき、その憤りは必ずしも為政者に向くとは限らない。

むしろ、社会的により弱い立場にいる人々、被差別部落や外国人に対する差別や迫害となってあらわれることも、歴史上決してまれではない。

「在特会」は2007年に設立されると、発足後およそ3ヶ月で会員数1000名を超え、現在ではその勢力は約8000人にまで拡大していると自称する。

一部のインターネットのサイトには、在日韓国・朝鮮人や中国人に対する差別的な書き込みがあふれる。

韓国人を一方向的に誹謗する「嫌韓流」というマンガはすでに4巻まで出版され、その累計発行部数は100万部に及ぼうとしている。

さらに、歴史を省みない自国中心主義の思想は、一部の政治家の中にも根強い。

「在特会」は、このような日本社会に台頭しつつある排外主義を背景に、その勢力を拡大しているのではないだろうか。



その意味では「在特会」だけが問題なのではなく、日本社会に潜む差別・排外主義こそが問題なのだ。

しかし多くのマスコミは、京都朝鮮第一初級学校やカルデロンノリコさんに対する「在特会」の行動を、ほとんど報道することはなかった。地元紙以外では、東京新聞が京都の事件をかるうじて報じたに過ぎない。

おそらくヨーロッパであれば、重大な人権侵害として社会的に毅然たる対処が行なわれることだろう。

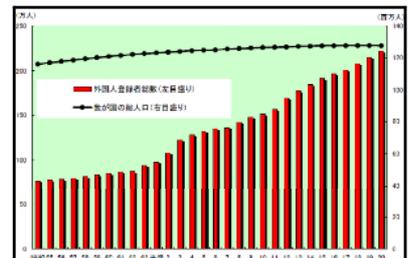
ようやくこの1月、京都弁護士会は「朝鮮学校に対する嫌がらせに関する会長声明」を発表して事件を非難するとともに、関係各機関に人権保障のための方策を要請した。事件を批判する声も、ようやく少しずつ広がり始めている。

「日本社会の良識」が問われている

いま、日本には200万人を越える外国籍の人々が暮らしている。これは、日本の人口の2%近い。また、日本国籍を持っていても、そのルーツが外国につながる人々も少なくない。

日本は決して「単一民族国家」などではない。とうに「多文化共生社会」を迎えているのである。

多文化共生をめざす様々なとりくみが進みつつある一方、社会的な不満を外国人に求める形で、「外国人排斥」が進む可能性も少なくない。



▲日本の人口と外国人登録者数の推移

民族学校だけではない。日本の学校にも多くの外国につながる子どもたちが通っている。その子たちにとっても、状況は同じである。

私たちが無関心であれば、京都や埼玉の事件が日本のどこかでふたたび繰り返される危険があるのだ。

京都朝鮮初級学校に子どもを通わせるある保護者は、こう訴えている。

私はこの問題が一部のレイシスト集団の問題ではなく、それを許容する日本社会の“良識”を問いたいです。もうこのような事態が起ころぬよう皆さん、どうかこの社会を良識とあるべき姿を考えてください。

今年「韓国併合」から100年。私たちはこの100年の歴史から、何を学んだのだろう。

まさに、「日本社会の良識」が問われているのだ。